親父も人でない。薩摩の分も刀切のうない。
敵かハさつまり通りがない。町人金持氣が
氣でない。老中増供兄ともない。全躰役人屁
腰ない。足でハ世話中おきゆうない。支でも先
ア軍ハない。ごふだかもしも清合ない。

○文久元年

あんどぬしちよがくれ

ヤレくいまずとよけまど。安公なんぞハ。ごふし
たまんごよ。ちんなよつまり久。世上の騒動。志

らぞよいるかく。若者なんぞの。かしゃと。ぬすんで。
船かよるたる。めうけと。大勢かゝへて。のらくら
夷人が。さまくて。およくか。源子おく病だりで。
えびすのまねして。政事とするので。諸色が言
くて。諸人が必死で。夷人がいぢつて。尤臣怒て。一
揆がおこつて。役人のろまで。世間こくらくて。贈ろを
とり込。お金とさせくて。奥向いぢつて。主張なん
ぞで。世中とだまして。口ほしつび。もらつて。非道
がつのしりて。尤臣捕て。毒害なんぞで。諸人が
怒て。ちまでハ。かゝんと。水戸さん。支度で。さつま

を支度で。役あるて。婦さん粉で。京都にのぼ
せて。九條とおせて。宮様なんぞの。奥様うぞつ
て。聟さぬ。きどりで。京都におうげで。大名とさへ
て。おくれ。だらく。善そふなんぞと。いふ氣で。あ
ろふが。それでハ。ずむめくなんぼ。あるけの役人
たちでも。以下代義理合。征夷に二字をバ。志ら
すバなるめへ。勿付にありさ。よくく見なせん。
十のや。大いおとしもいかねく。小僧の自ぎまで。
どふなる者のへ。其上小僧も。桀紂をどきふ。
お庭で。女中のもだの力角や。あひるを。毎日四五

十さりしを。なぐさみなんぞハ。あんまり。あ
きまらい。さたでハねくなく。征夷のおしよくが。更
がと以やなし。京都へ。返上させるが。よかよかろ
ふ。それとも此まゝ。重たいものなし。心を入へ。武
士ぎをおこして。夷人を拂て。京都か大せん。
日本大事と。蘭家にぬすく。吳国へ送る。ぞん
とふなまの。おもとまたなし。諸人が恐怖し。天
下が。大平。うぬらも。まるまの安どで。あろふ。ぬ
くあきれに。あきまて。ぞまつた。先日見ちき
を。おれにいつこら。新規の夷人が。初めてきく

とて。犬をかをも。用人なんぞハ。犬よりなごれ
た。えびすのおひげに。ついそる。志よみと。雨や
ら。ふりくへ。以くへ。なくもた。つらざるうへ。是
でも志らずに。年氣でいるなすら。今まで久なせ
い。隠居が出のみて。天神、もどきしに。ヤレくへ。おハれ
かゝ。始末ちやわくかくへ。ぶらイくへ。

○
文久千代保久連

ヤレくへ。武家世上はみな住。少でもらん禄へ。せんなか
久せうハ。皆まん而かし。いましとよけもとゞ。あま
さけまきして。尺時壁乳ずも。安産がなくて。禄へ
去年三月。後首を雨つちまて。坊主返りの悪徒
やうられ。孫をきつて川て。強盗を行ふ欲心坊
長利欲をそなく。吳人と。あつめて。浪人とぶ
やまし。是無よいのなり。みだんし。内乱と。共
なかもきて。禄へもられど。去年中よ。
京都をさわしら。清蓮と。四方つくる川を。
めきらん。出しそ。以下向一派。まづくへ。しめ
たと。兄てふつうもなく。以下向とそろうる。清四向
あすもよ。済水つくへ。きつらせた。おちらこの也な

さるしツ遠慮ながら。此方もおろそかなど。上の不
存ち役人たちらがみんな仕出し。居を入た
まゝまでハかくこひそれハよりけまで。私欲ら
こゝみて。後の大事ハかしもか彼まどもを目く
とつきんのごとて。麻事けりたごとくもの
がまだ。せるも恥ぞに。一万石をふへりよ
喰はく。大食くらひの。たらけさ。腹もめづ。含
傷でもしらで。詳んたが。体しだよ。上のツ存ぶ。
おのかりつたり。大悪。大欲。善道悪。善道のべ
らがり。ゆるつま。ツ存事あはぬるぬさいと

いやさ。下れ難義ハまつゝぬ。めりしこ。不実
西極の。役人さちらが。今年一もくい。せ何もお
てハ。今まゝんなきへ。大事が。おこるぞ。早くす
誉ら川くアきさめこ。水戸と。虜度と。神
まはがめて。いよし。陽武運長久万民快楽けらく
とツ。顧ひたまをさとよ。